



紙の宝物

村田沙耶香

子供の頃、ノートを切って四つ折りにし、ホチキスで留めて、自分だけの小さな本を作って遊ぶことが、よくあった。漫画や小説を書くこともあれば、ページの中に好きな小物のお店の紹介文や可愛い服を着た女の子の絵を並べて、自分だけの雑誌を作ったりもした。

紙と鉛筆さえあれば、遊びは無限だった。友達と一緒に暗号表を作って秘密の言葉で手紙を交換したり、互いの似顔絵を描いたり、可愛い女の子の絵を描いてそこから物語を想像したり。新聞に挟まれたチラシの中に、裏が白いものがあると、「ほら、使っていいよ」と父も母も私に渡してくれた。何枚渡されても、紙はすぐに足りなくなつた。上手に描けた絵や友達がくれた大切な手紙など、捨てられない紙は増える一方だった。引き出しの中には、そんな宝物がごっそり詰まっていた。

「いらぬものは捨てなさい」

と母によく叱られたが、傍目にはゴミに見えても、私には何より大切なものだった。少しでも弄られると怒つたし、何かがなくなつたら大騒ぎだった。どの「紙の宝物」も、唯一無二で、一度失くしたらもう二度と出会うことができないものたちだった。

小説を書いたのは、そんな「紙の宝物」を集め続ける毎日の延長だったと思う。友達に見せたり渡したりするのはなく、自分のためだけに、書いてみたくなつた。ホチキスで留めた薄い本ではおさまらないような、もつとずつと長い物語を、紙の上に発生させたくてたまらなくなつたのだ。

文房具屋さんへ行って、ルーズリーフを買った。それを挟むファイルは子供には高級品だったので、紙だけを買った。小学校で使っている可愛らしい表紙のノートと違って、シンプルなお白紙だった。私にはビニール袋の中にごっそり入った紙の束が、書きたい物語を無限に綴っていくことができる、魔法のノートのように感じられた。

小学校6年生くらいのころ、ワープロを手に入れてからは、「紙の宝物」は引



むらた・さやか●作家。千葉県生まれ。2003年「授乳」で第46回群像新人文芸賞優秀作に選ばれデビュー。09年「ギンイロノウタ」で第31回野間文芸新人賞、13年「しるいの街の、その骨の体温の」で第26回三島由紀夫賞を受賞。16年、「コンビニ人間」で第155回芥川賞を受賞し、ベストセラーに。主な作品に「タダイマトビラ」「殺人出産」「消滅世界」など。

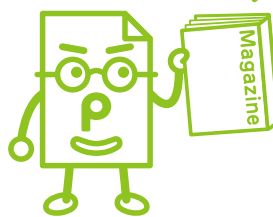
き出しの中には納まりきらなくなつていった。それらは袋に入れられ、本棚の中に押し込められた。母は呆れていたが、未完だろうが何だろうが、自分の作った物語を捨てることはできなかった。主人公の顔や着ている服装を絵に描く癖は子供のころからで、それらが描かれた紙も大量にあつた。テストの問題用紙の裏側だろうが、ルーズリーフの切れ端だろうが、そこにとっても上手に主人公の顔が描けていたら、それを捨てるなんて残酷なことには決まらなかった。

私が育った家にはまだ、私の子供時代の「紙の宝物」が眠っている。誰かに読まれたらとてもなく恥ずかしいが、決して捨てることはできないだろう。大人になつた今も、「紙の宝物」は増えていく一方だ。それに埋もれながら生きていくことが、自分の幸福なのだと思う。だからきつとこれからも、宝物を集め続けるのだ。

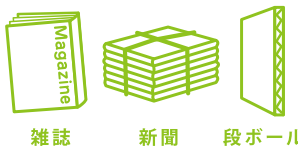
ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

雑誌なら、雑誌だけひとまとめ。

雑誌・新聞・段ボールなど、回収された古紙は、それぞれ違う紙へとリサイクルされます。だから同じ種類の古紙でまとめた方がリサイクルしやすいし、古紙の品質だって良くなるんです。それにその方が持ち運びだってラク。まとめるだけで、いろんなメリットが生まれるんです。



主な古紙の一例



雑誌 新聞 段ボール

その他にも

家庭から出る左記以外の紙(雑がみ)、オフィスペーパー、紙パックなどがあります。
※分別方法は、地域によって異なります。詳しくは自治体または回収者にご確認ください。

紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

<http://kamitsubu.com/>

今回は6月1日号、室伏広治さんです。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo: Shiro Miyake